

旧松岡藩家老 松原郷左衛門家と屋敷地* 松岡藩士とその屋敷地の研究 その10

伊豆蔵 庫喜^{*1}, 多米 淑人^{*2}, 吉田 純一^{*1}

A Study of the former Matsuoka Clan Chief retainer *Matsuoka Gouzaemon family* of Samurai Residences The Study on the Samurai's Premises in the Matsuoka Clansman, part10

Kouki IZUKURA^{*1}, Yoshihito TAME^{*2} and Junichi YOSHIDA^{*1}

^{*1} FUT Fukui Castle and Castle Town Research Laboratory

This paper was study of the samurai residences of the *ISONO-Tamiya family* and *SHIBUYA-Gonzaemon family*, former Matsuoka clan members. Both families lived in *Osensui-Machi*, the residential district of the senior samurai, for about 140 years after moving to Fukui Castle Town. Both the *ISONO-Tamiya* and *SHIBUYA-Gonzaemon families* serve as *YORIAI-SEKI* in the Fukui Clan. Both families were adjacent to each other in both Matsuoka and Fukui castle towns, with the *Isono-Tamiya family* to the north and the *Shibuya-Gonzaemon family* to the south.

Key Words : 旧松岡藩, 福井城下, 松原郷左衛門家, 北川家, 中ノ馬場, 下馬門内

1. はじめに

本研究は正保2年(1645)から享保6年(1721)までの76年間、福井藩の支藩であった松岡藩の藩士とその屋敷地に着目し、松岡城下における屋敷割や個々の屋敷地の位置および大きさについて検討するとともに、享保6年の福井藩への併合に伴う松岡藩士の福井城下における拝領地についても明らかにする⁽¹⁾。

本稿は既報⁽²⁾に続き、旧松岡藩士の松原郷左衛門家とその屋敷地について考察する。松原郷左衛門家は、旧松岡藩士の最上級である番外に属し、家老や城代に就ける5家に含まれる⁽³⁾。

2. 松原郷左衛門家について

松原郷左衛門家の系譜は、慶長15年(1610)から延宝4年(1676)までは『続片叢記(下)』⁽⁴⁾で確認することができ、享保7年(1722)以降は「剥札」・「士族」⁽⁵⁾によってわかる。また、松岡時代の家禄は『松岡様御給帳』⁽⁶⁾で把握でき、福井に移ってからの家禄は各時代の給帳⁽⁷⁾で確認できる。図1は松原郷左衛門家、ならびに松原家を相続した北川亘之助家の系譜を示したものである。

2.1 松岡時代

松原郷左衛門家の初代源五右衛門(改名後、郷左衛門)は松岡藩に仕え、承応3年(1654)に御番頭を勤めている。2代を継いだ実子の與惣右衛門(改名後、郷左衛門)は、貞享3年(1686)に御番頭、元禄9年(1696)には松岡藩の家老職に取り立てられている(図1参照)。

* 原稿受付 2024年4月22日

^{*1} FUT 福井城郭研究所

^{*2} 工学部 建築土木工学科

E-mail: kouki-i@fukui-ut.ac.jp

松原郷左衛門家

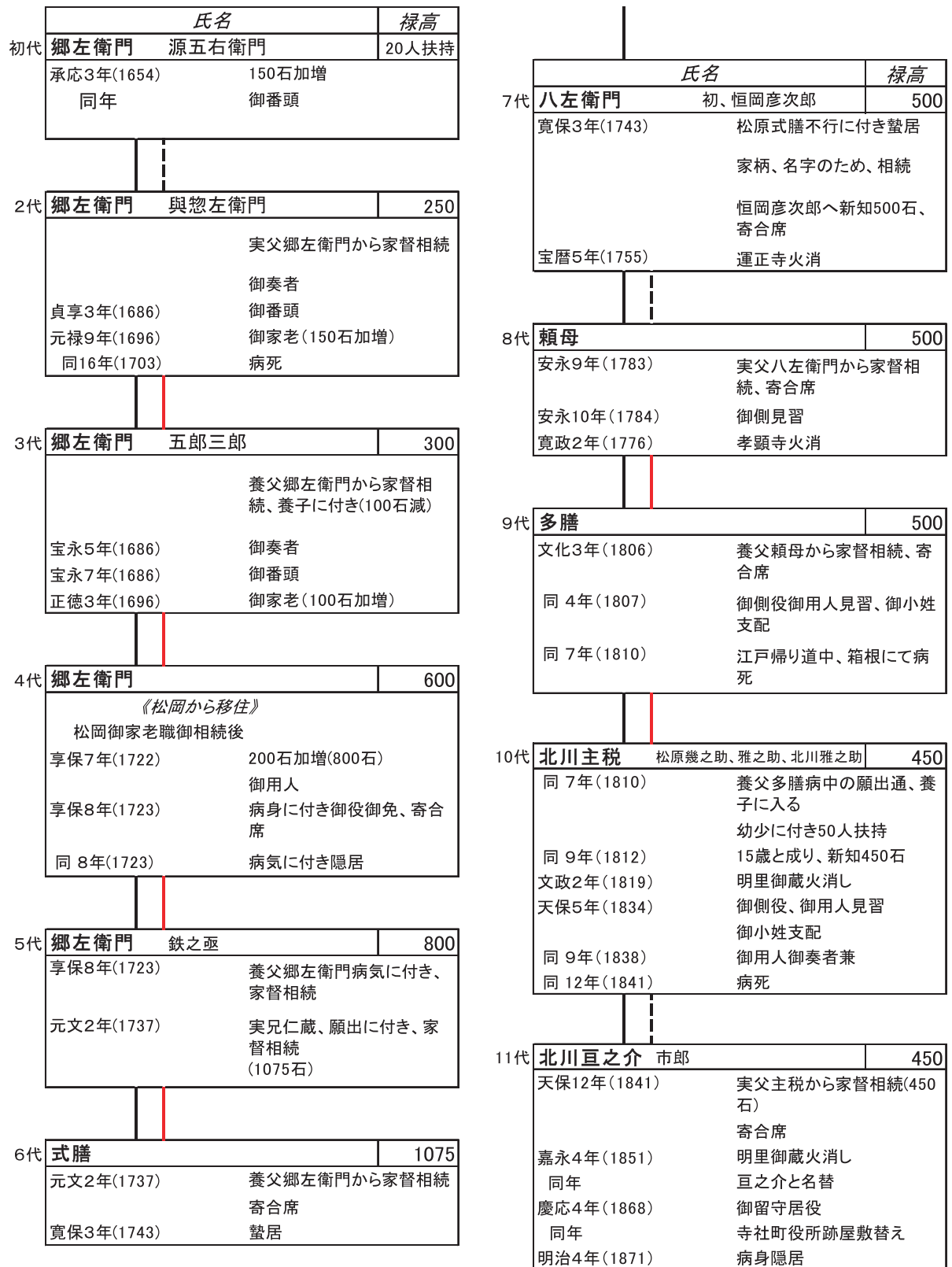
* 図中の歴代当主を結ぶ縦実線は家督相続、縦点線は実父、**赤色実線**は養子を示す。

図1 松原郷左衛門家の系譜

その後、松原郷左衛門家は元禄 16 年(1703)に 2 代與惣右衛門の病死に伴い、養子に入った五郎三郎（改名後、左門式膳郷左衛門）が 3 代を継いでいる。その後、3 代郷左衛門は宝永 5 年(1708)に御奏者、同 7 年(1800)に御番頭など藩の要職に就き、正徳 3 年(1713)には家老になっている⁽⁸⁾。

2.2 福井時代

松岡藩は享保 6 年(1721)に 2 代藩主昌平（後、福井藩 9 代藩主宗昌）が福井藩を継いだため、多くの松岡藩士は享保 8 年(1723)から元文 4 年(1739)の間に福井城下に移っている。

図 1 に示すように、福井城下に移った 3 代郷左衛門は、享保 7 年(1722)2 月に福井藩の御用人に就き、家格も福井藩士の最上級家格の高知席に次ぐ寄合席になっている。しかし、同年(1722)8 月に病気のため職を辞している。3 代郷左衛門は、翌 8 年(1724)2 月に隠居し、養子の鉄之丞（改名後、郷左衛門）に家督継承を福井藩に願い出て、同年 3 月には願い出通り、4 代当主を養子の鉄之丞が継いでいる。

その後、松原郷左衛門家は同 2 年 11 月に養子の式膳が 5 代当主になっている。ところが、『福井藩士履歴 5』⁽⁹⁾に「寛保三亥正月十九日松原式膳不行跡ニ付蟄居被仰付、家柄之儀故名字為相続、恒岡彦次郎へ新知五百石被下、寄合」とあり、5 年後の寛保 3 年(1742)1 月 19 日に 5 代当主の式膳は不行により蟄居させられたこと、松原郷左衛門家は名家であったため苗字が残されたこと、家督は養子に入った恒岡彦次郎（改名後、八左衛門）が新たに 500 石与えられて 6 代当主になったこと、家格も寄合席を継承していることなどが明らかにできる。

6 代以降は、安永 9 年(1783)に実子の頼母が 7 代を継ぎ、文化 3 年(1806)には養子の多膳が 8 代当主になっている。しかし、8 代多膳は文化 7 年(1810)8 月に江戸からの帰りの道中、箱根にて病死している⁽¹⁰⁾。

8 代多膳の病死に伴い、松原郷左衛門家の家督は養子に入った北川雅之助（後、主税）が同 7 年 10 月に 9 代を継いでいる。これ以降は北川を名乗っているが、9 代は主税が 10 代は実子の市郎（後、亘之介）が松原郷左衛門家を相続して家格も寄合席のまま慶応まで変わっていない⁽¹¹⁾。

以上のように、松原郷左衛門家は初代源五右衛門が承応 3 年に松岡藩の御番頭を勤めていたこと、2 代当主の與惣左衛門が元禄 9 年に松岡藩の家老に取り立てられ、正徳 3 年には 3 代五郎三郎も家老職に就いていたこと、4 代郷左衛門時代に福井藩の寄合席に取り立てられて以降、10 代北川亘之介まで寄合席を継承していたこと、5 代式膳が寛保 3 年に不行のために蟄居させられていたこと、松原郷左衛門家が名家であったために養子の恒岡彦次郎が 6 代を継いだこと、さらに文化 7 年には養子に入った北川主税が家督を相続して 9 代当主になったことなどが指摘できる。

2.3 家禄

松原郷左衛門家の家禄は、初代源五右衛門が 20 人扶持で松岡藩に登用されて以降、御番頭に就いた承応 3 年に 150 石が加増されている。その後、2 代與五右衛門が 250 石で家督を継ぎ、家老になった元禄 9 年に 150 石が加増されて 400 石になっている。家禄は 3 代を継いだ五郎三郎が養子であったため一旦 300 石に削減されているが、五郎三郎が家老職に就いた正徳 3 年時に 100 石が加増され、400 石に戻っている⁽¹²⁾。

福井城下に移ってからは、享保 7 年に 200 石の加増があり、都合 600 石になり福井藩においても上級武士に含まれている。さらに元文 2 年(1737)には実兄の仁蔵の家禄を相続したことで 1075 石になっている。

しかし、5 代当主の式膳が不行により寛保 3 年に蟄居させられたため、500 石に削減されている。それ以降、松原郷左衛門家の家禄は 500 石のまま 8 代多膳まで変わっていない。その後、家督を相続した北川主税が 15 歳になった文化 9 年(1812)に新知として 450 石が与えられて以降、北川家は 450 石のまま明治を迎えている⁽¹³⁾。

3. 屋敷地の変遷

松岡時代の松原郷左衛門家の屋敷地は、『続片聳記(中)』所収の慶安 2 年(1649)の記述⁽¹⁴⁾、および正徳 4 年(1714)の『松岡家中絵図』⁽¹⁵⁾ (図 2-1) で確認できる。一方、福井城下への移住後の屋敷地は、享和 3 年(1803)の『福井分間之図』⁽¹⁶⁾ (図 3)、文化 8 年(1811)の『福井分間之図』⁽¹⁷⁾ (図 4) や慶応年間(1865～67)の『御城下之図』⁽¹⁸⁾ (図 5) などの城下図でわかる。

さらに福井城下での屋敷替えは、天保2年(1831)の『御家中転宅考』⁽¹⁹⁾(以後、『転宅考』)で把握できる。それらを基に、松岡時代から福井時代までの松原郷左衛門家の屋敷地の変遷を纏めたものが表1である。

3.1 松岡城下の屋敷地

松岡藩士の屋敷割や個々の屋敷地の位置や大きさに関する史料は、『続片叢記(中)』所収の慶安2年(1649)の記述、および図2-1に示した正徳4年の『松岡家中絵図』である。

慶安2年の記述によると、松原郷左衛門の名前が確認でき、間口が16間、奥行が25間とあり、坪数を算定すると400坪となる。したがって、慶安2年時の松原郷左衛門家は400坪の屋敷地を拝領していたとみてよい。

一方、図2-1にみられる松原郷左衛門家の屋敷地は、松岡藩主が居住する「御屋舗」と堀を隔てた西側の通り沿いに確認できる。この一画は松岡城下において上級武家町に相当し、南隣は蜷川七郎兵衛家である。敷地の大きさは間口が46間4尺、奥行が23間半(図2-2参照)で、面積は約1090坪である。当時の松岡藩の番外の屋敷地は、概ね200坪～650坪⁽²⁰⁾であることから、松原郷左衛門家はかなり大きめの敷地を有していたことが認められる。

3.2 福井城下の屋敷地

福井城下への移住直後の松原郷左衛門家の屋敷地は確認できないが、前述の『転宅考』に「同(柳御門通り)北表 今菅沼 慶長 山本内膳 寛永度 松原右衛門代々 享保 中根靱負 再松原多膳 寛保三 宇都宮治左衛門(後略)」⁽²¹⁾とあり、寛永期に松原右衛門の屋敷地であった柳門通りに再び、松原多膳が拝領していたとみてよい(表1参照)。但し、年代は特定できない。その後、宝暦8年(1758)～同10年(1760)の2年間は、足羽川の南岸にある毛矢町に移っている。

それ以降、松原郷左衛門家の屋敷地は同じ『転宅考』に「今中川(中略)同(宝暦)十 毛やより 松原頼母(後略)」⁽²²⁾とあることから、松原郷左衛門家は7代頼母時代の宝暦10年に毛矢町より中ノ馬場に屋敷替えしていたことが明らかである。また、屋敷地の位置は、図3の享和3年の『福井分間之図』をみると、福井城本丸の東寄りの中ノ馬場に確認でき、『転宅考』の記述とも一致する。

宝暦10年以降の屋敷地についても、『転宅考』に「下馬御門(中略)文化六年以後自宅 中ノ馬場入代り 松原多膳」⁽²³⁾との記述があり、8代当主の多膳時代の文化6年(1809)には、中ノ馬場から下馬御門内の屋敷地に転居したことが認められる。下馬御門内に転居した松原郷左衛門家(後、北川家)の屋敷地は、文化6年以降の同8年の『福井分間之図』(図4)や慶応年間の『御城下絵図』(図5)をみても、下馬御門内に屋敷地が確認できる。

以上のように、松原郷左衛門家は、福井城下移住直後は福井城本丸の西側の柳門通りに屋敷地を拝領していること、宝暦8年～10年にかけては多くの旧松岡藩士が住む毛矢町に転居していたこと、宝暦10年～文化6年の間は福井城本丸の東側にある上級武家町の中ノ馬場に屋敷替えしていること、文化6年以降は下馬御門の内側(二ノ丸の南端)に屋敷を構えていたことなどが指摘できる。



図2-1 正徳4年(1714)の松原郷左衛門家
(松岡城下 御屋敷_西側)
(『松岡家中絵図』部分図, 松平文庫, 福井県文書館保管)



図2-2 松原郷左衛門家の敷地
(図2-1の拡大図)



図3 享和3年(1803)の松原郷左衛門家
(福井城下 中ノ馬場)
(『福井分間之図』部分図, 松平文庫, 福井県文書館保管)



図4 文化8年(1811)の松原郷左衛門家
(福井城下 下馬御門内)
(『福井分間之図』部分図, 松平文庫, 福井県文書館保管)



図5 慶応年間(1865-67)の松原郷左衛門家
(福井城下 下馬御門内)
(『御城下之図』部分図, 松平文庫, 福井県文書館保管)

表1 松原郷左衛門家の屋敷地の変遷

年代		屋敷地 (町名)	備考
正徳4年	1714	《松岡城下》 大名町	『松岡家中絵図』に記載
享保6年	1721	↓	松岡藩2代藩主昌平が宗昌と改名し、 福井藩9代藩主を相続
享保6年 ～元文4年	1723～39		松岡藩土、福井城下へ移住開始
享保年間	1716～35	《福井城下》 大名町	『御家中転宅考』の記述
寛保3年	～1743	柳門通り	『御家中転宅考』に記載
宝暦8年	1758	毛矢町	『御家中転宅考』に記載
宝暦10年	1760	中ノ馬場	『御家中転宅考』の記述
文化6年	1809	下馬門内	『御家中転宅考』の記述
慶応年間	1865～67		『御城下之図』に記載

4. 福井城下における松原郷左衛門家の屋敷地の規模

後掲する図6～8の3図は、嘉永5年(1852)の『御家中屋敷地絵図 中巻』⁽²⁴⁾に掲載されている松原郷左衛門家の屋敷図である。

4.1 柳門通りの屋敷地

図6に示した屋敷図は、添書きに歴代の居住者が列記されており、「松原右衛門」のほか「松原仁蔵」や「松原式膳」など歴代当主の名前が確認でき、図6は寛保2年～宝暦8年にかけて松原郷左衛門家が居住していた柳門通りの屋敷図とみてよい。

表（正面）は北向きで、表間口が32間4尺5寸、裏が32間、奥行は東辺が28間4尺7寸、西辺が27間2尺7寸の長方形で、面積は900坪である。

4.2 中ノ馬場の屋敷地

図7に示した屋敷図の添書きにも、歴代の居住者が列記されている。添書きをみると、「松原多膳」の名前が確認できる。したがって、図7は松原郷左衛門家が宝暦10年～文化6年の約50年間、拝領していた中ノ馬場の屋敷図と判断できる。

敷地は表（正面）が東向きで、前掲の城下図（図3）とも合致する。表間口が28間5尺、裏が15間4尺、奥行は北辺が43間、南辺が42間4尺の台形で、面積は952坪である。中ノ馬場に転居した屋敷地の坪数は、先の柳門通りの屋敷地（900坪）と同位の広さである。

4.3 下馬御門内の屋敷地

図8をみると、元図の上に「北川亘之介」と書かれた付紙で修正されている。さらに、添書きには「北川亘之介」と記されており、図8は文化6年に屋敷替えした下馬御門内の北川亘之介家（相続前、松原郷左衛門家）の屋敷図である。

敷地は表（正面）が西向きで、前掲の城下図（図4・5）とも合致する。表間口が24間3尺3寸、裏が26間3尺9寸で、奥行は北辺が25間4尺5寸、南辺が27間9寸のほぼ長方形で、面積は687坪である。したがって、これまで松原郷左衛門家が拝領してきた屋敷地（柳門通りが900坪、中ノ馬場が952坪）よりかなり小さかったことが認められる。

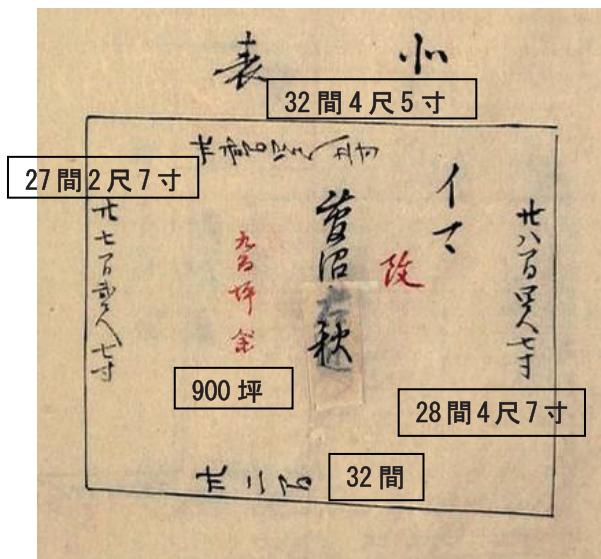


図6 柳門通りの松原郷左衛門家の屋敷図
(嘉永5年『御家中屋敷地絵図（上）』部分図、
松平文庫、福井県文書館保管)

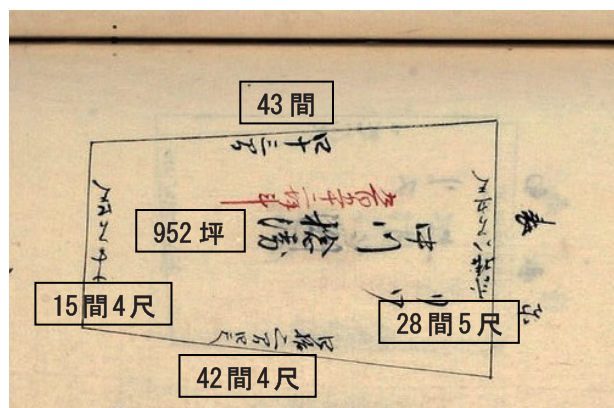


図7 中ノ馬場の松原郷左衛門家の屋敷図
(嘉永5年『御家中屋敷地絵図（上）』部分図、
松平文庫、福井県文書館保管)

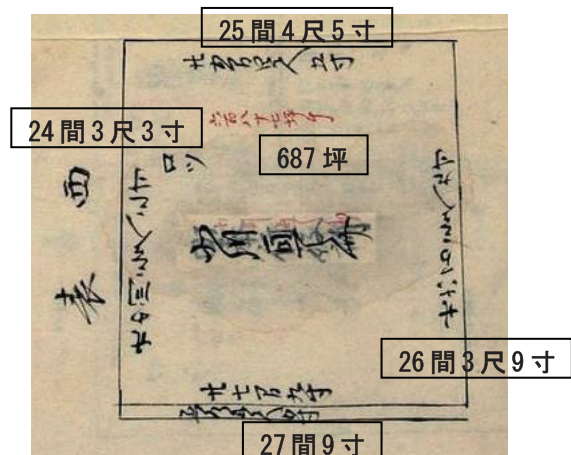


図8 下馬御門内の松原郷左衛門家の屋敷図
(嘉永5年『御家中屋敷地絵図（上）』部分図、
松平文庫、福井県文書館保管)

5. おわりに

以上、旧松岡藩の家老松原郷左衛門家とその屋敷地について検討した結果、松原郷左衛門家は10代にわたり松岡藩と福井藩に仕えた家であったこと、松岡時代は最上級家格の番外に含まれ、2代與惣右衛門と3代五郎三郎が家老を務め、福井時代は3代以降、次席の寄合席を継承していたこと、5代式膳が寛保3年に蟄居させられたが名家であったために養子の恒岡彦次郎が6代を継いだこと、松岡城下の屋敷地は「御屋舗」の西側に大きめの屋敷地(1096坪)を拝領していたこと、福井城下移住後は、上級武士の居住区である柳門通りや中ノ馬場などに約900坪の屋敷地を拝領していたことなどが指摘できる。

また、既報のように、福井城下における居住区や敷地の大小は、家格や家禄の高低との関連性が認められ、福井藩の上級武士の敷地面積(坪数)はほぼ500坪～1000坪である⁽²⁵⁾。松原郷左衛門家も他の旧松岡藩士同様⁽²⁶⁾、上級武家町に屋敷を与えられていたことや拝領していた屋敷地は、いずれもおおよそ600～900坪であり、上級武士の坪数の基準に基づいて屋敷割されていたと判断できる。

注

- (1) 松岡藩士の沿革や概要については、福井藩の正史である、福井県立図書館、福井郷土誌懇談会共編、国事叢記 上、(1961)。福井県立図書館、福井郷土誌懇談会共編、片簞記・続片簞記、(1955)。および野村英一、松岡町史上巻、(1978)。などを参考にしている。
- (2) 伊豆蔵庫喜、多米淑人、吉田純一“松岡藩士とその屋敷地の研究 その1-8”，福井工業大学研究紀要，日本建築学会北陸支部研究報告集，(2019-2023)，などで報告している。
- (3) 野村英一，松岡町史上巻，(1978)，pp.223-224。
- (4) 福井県立図書館・福井県郷土誌懇談会共編，続片簞記下，(1955)，pp.533-594。
- (5) 松平文庫，福井県文書館保管，剥札・士族，本研究では，剥札や士族の刊行本である福井県文書館，“福井県文書館資料叢書 9-14 福井藩士履歴 1-6”，(2013-2018)。を使用する。
- (6) 島田氏蔵，松岡様御給帳，前掲(3)の松岡町史上巻，pp.208-223。所収。
- (7) 松平文庫，福井県文書館保管，源秀康公御家中給帳，斎承御代給帳。など歴代の給帳を参考にしている。
- (8) 松岡時代の松原郷左衛門家の系譜は，前掲(4)の 続片簞記下，p.546，p.581，p.603 を参考にしている。
- (9) 福井県文書館，“福井県文書館資料叢書 13 福井藩士履歴 5”，(2017)。
- (10) 福井城下移住後の松原郷左衛門家の系譜は，福井県文書館，“福井藩士履歴 5”，(2017),pp.252-253 を参考にしている。
- (11) 松原郷左衛門家の家督を相続した北川亘之介家の系譜は，福井県文書館，“福井藩士履歴 2”，(2014),pp.254-255 を参考にしている。
- (12) 松岡時代の松原郷左衛門家の家禄は，前掲(4)の 続片簞記下，を参考にしている。
- (13) 福井城下移住後の松原郷左衛門家および北川亘之介家の家禄は，前掲(9)の“福井藩士履歴 5”，前掲(11)の“福井藩士履歴 2”を参考にしている。
- (14) 前掲(3)の松岡町史 上巻，pp.230-234,所収。
- (15) 松平文庫,福井県文書館保管，松岡家中絵図，正徳4年(1714)。
- (16~18) 3枚の城下絵図はすべて，松平文庫，福井県文書館保管。
- (19) 松平文庫，福井県文書館保管，大谷氏信著，御家中転宅考，天保2年(1831)。
- (20) 松岡城下における武家屋敷地の坪数は，伊豆蔵庫喜，多米淑人，吉田純一“松岡城下における武家屋敷地の分布”，福井工業大学研究紀要，Vol.49,(2019)，pp. 257-265。で詳しく報告している。
- (21~23) 前掲(19)の御家中転宅考。参照。
- (24) 松平文庫，福井県文書館保管，榊原十郎太夫，御家中屋敷地絵図 中巻，嘉永5年(1852)。
- (25) 福井藩の上級武家屋敷の坪数については，伊豆蔵庫喜“上級武家屋敷地の大きさの比較”，日本建築学会北陸支部研究報告集，Vol.47，(2004)，pp. 248-251，で詳しく報告している。
- (26) 旧松岡藩士の福井城下における拝領地については，伊豆蔵庫喜，多米淑人，吉田純一“福井城下における旧松岡藩士の拝領地”，福井工業大学研究紀要，Vol.50，(2020)，pp. 278-286，参照。

(2024年8月2日受理)